

KONAN UNIVERSITY

**【新刊紹介】原洋一監修 / 高石恭子編 『働くママと
子どもの<ほどよい>距離のとり方』(柘植書房新
社 二〇一六年三月)**

著者	高石 恭子
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	17
ページ	173-175
発行年	2016-02-29
URL	http://doi.org/10.14990/00002826

【新刊紹介】

榊原洋一監修／高石恭子編

『働くママと子どもの』

△ほどよい▽距離のとり方』

(柘植書房新社 二〇一六年三月)

高石 恭子

本書は、甲南大学人間科学研究所が展開してきた子育てをめぐる一連の共同研究プロジェクトから生まれた一冊である。本

学には、地域の人々に向けた子育て支援の臨床実践の長い歴史があり、また本研究所の共同研究チームにより、同地域で就学前の子どもを育てる母親、父親、祖母を対象とした「子育て環境と子どもに対する意識調査」が、二〇〇〇年から計五度行われてきた。そこから得られた成果は、『現代人と母性』（新曜社、二〇〇三年）、『育てることの困難』（人文書院、二〇〇七年）、『子別れのための子育て』（平凡社、二〇一二年）という三冊の叢書として出版されている。

筆者は、二〇〇三年から二〇一三年までの十年間、この共同

研究チームの責任者として活動に携わってきたが、そのなかで明らかになってきたのは、子育て意識の二極化、すなわち虐待や育児放棄の方向と、母子密着による相互依存の方向であり、とりわけ後者の傾向は、子育て期には問題として顕在化していくものの、子どもの育ちや心理―社会的自立を阻害する大きな要因となっているのではないかということである。大学を出て一定の社会的達成を得た女性が母親になったとき、子育てにも全力投球しようとして思うにまかせず、働く母親、専業主婦として子育てする母親、それぞれに罪悪感を抱えて育児ストレスを高めている今日の構図が見えてきた。これらは育てる者の「意識」（心理）の問題であり、子育て支援の「制度」や「施設」を拡充するだけでは解決できない、新たな視点からのアプローチを必要とする問題であることが確認された。

さて、そのような筆者らの共同研究の内容に共感し、子育て意識に関する啓発的な本を作りたくと筆者に声をかけてくださったのが、叢書の編集者であり自らも子育て中の安井梨恵子さんである。キーワードは△ほどよい距離▽。ここでの△距離▽とは、心理―物理的距離を意味し、背景にはM・マラーの分離―個体化論やD・W・ウイニコットの母子発達論が想定されている。ネグレクトでもなく、密着でもなく、子育てにまつわる世間の集合的な意識や圧力から自由になり、親と子がほどよい距離を見つけて育ち合っていくことが、やがて子どもの健全な

自立につながっていくのではないかという問いかけを基調として、本書ではまず「働く母親」の意識にはたらきかけることを目標に置いた。いかに子どもに細やかに密接にかかわるかという指南書は数多く出版されているが、本書はむしろ「かかわらねばならない」という強迫観念やそこからたられる罪悪感の問題に光を当て、一般にはマイナスと意識される事象の中にプラスの意味を見出しにくいこうとする、あまり類をみない子育ての書だと言えるだろう。

本書は、プロローグ「親子が幸せに暮らすための△△よい距離▽▽」、第二章「子どもの成長別にみる△△よい距離▽▽の取り方」、第三章「わが子は「普通」？ 発達の差が気になる△△よい距離▽▽」、第四章「新しい家族のカタチ」、第四章「ワーク・ライフ・バランスを考える」、エピローグ「働くママが幸せになるための処方箋」という構成になっている。

各章を順に紹介すると、第一章は、乳児期から青年期まで、各年代の子どもを育てながら働く母親（新聞記者からジャーナリスト、医師、看護師、編集者、公務員から大学教員というさまざまな経歴の）が書いた子育ての体験記に対し、それぞれの時期に合った「親と子の△△よい距離▽▽」をどう見つければよいかを筆者が解説するという形式をとっている。いずれも首都圏での子育て体験であり、地方の子育てとはまた違った緊張感がある。しかし、企業フルタイム、働き方が選べる専門職、

フリーランス、管理職と若手社員など、一言で「働く母親」といっても、それぞれ意識のありようは多様であることがよくわかり、参考になる。

第二章は、本書の監修もいただいた小児科医、榊原洋一氏による発達と発達障害についての解説である。わが子の発達をどう捉えるか、また専門家（医師）の言葉をどう理解するか、適切な知識をもっておくことで、子どもとの△△よい距離が保てるという趣旨で書かれている。子育ての教科書ではなく、子育ての教科書をどんなスタンス（距離）で読めばよいかというガイドと言えようか。

第三章は、家族論・フェミニズム論を専門とする社会学者、千田有紀氏による、近代社会史から子育て意識を見直す論考である。今日のわが国で暗黙の前提とされている「家族」「母性」「母親」といった概念は、実は明治以降の政策と結びついた時代特有の意識から生まれたものであり、現実はずに変化していること、また意識を現実にして変革していく必要があることを自らの子育て経験も踏まえて力強く論じている。

第四章は、本学人間科学研究所の研究員であり、筆者らの共同研究にも参加してくださった家族社会学者、中里英樹氏によると、心理学者ヴォイタノフの理論を援用しながら、「仕事と子育て」についての新しい提案をしている。必要なのは、仕事

と子育てという二つの対立物のバランスをとることではなく、「仕事」「家族」「コミュニティ」という三つの領域をトータルに生きようとする意識であるという。これは、働く母親に限らずすべての人に有効な視点であり、それぞれの領域とのへほどよい距離を模索する上で大いに参考になるだろう。また、第二章～第四章末にはそれぞれの章に関連した内容の「コラム」が配されているが、第四章のコラム「イクメン時代の男性と子育て」（半ば体験記）を執筆している濱田智崇氏（臨床心理学者）も、人間科学研究所研究員である。

以上のように、本書は人間科学研究所の学際的な共同研究から生まれ、知の社会還元という意義をもつ、ユニークな子育ての啓発書である。子育て中の人々だけでなく、子育て支援者、親子や家族関係の研究者にも広く読んでいただきたいと願う。

（たかいし きょうこ／臨床心理学）